

憲法という人類社会の知恵

～ 日本の先人たちはどう受けとめてきたのか ～

講師 樋口 陽一さん(東京大学名誉教授)

1934年仙台市生まれ。日本学士院会員。専攻は憲法学。
著書に『もういちど憲法を読む』『憲法と国家』『憲法という
作為』(岩波書店)『「日本国憲法」まっとうに議論するため
に』(みすず書房)『個人と国家』(集英社)など多数。

正しいものに従うのは正しいことであり、最も
強いものに従うのは必然のことである。

力のない正義は無力であり、正義のない力は圧
政である。

力のない正義はただちに反対されてしまう。な
ぜなら悪い奴がつねにいるからである。正義のな
い力は非難されてしまう。したがって正義と力は
いっしょにしておかなければならない。そのため
には正しいものが強くなるか、強いものが正しく
ならなければならない。

正義は論議的になる。力は非常にはっきりして
おり、論議無用である。こういうわけで、これまで
正義に力を与えることはできなかった。なぜなら力
が正義に反論して、「正義など正しくはない、正しい
のは自分だ」と言ったからである。

こうして人は、正しいものを強いものにすること
ができなかったのが、強いものを正しいものとした
のである。

— パスカル『パンセ』より

と き: 9月11日(土) 午後2時～4時

と ころ: エルパーク仙台 ギャラリーホール

参加費: 500円